

第二期 第二〇号 二版

(無料)

音信不通

本のビオトープ

2018.03.20

定有堂書店 発行

柳父章さんのこと

奈良 敏行

記号について

坂本 修一

ネタの永遠

ワクサカソウヘイ

北海道オホーツク紀行 (4)

芝野 浩貴

イヌの名は (続き)

ムラカミヒロミ

ヒップホップと回転寿

齋藤 仁昭

私も言いたい翻訳語

山本千津子

鳥取あれこれ その十九

内田 克彦

名曲と向き合ふ為に

秦卓 梅林

牝鶏

スザワマリコ

なんでもない話

伊達 文

書くこと

中山 早織

妄想小説

古賀 啓三

遊動円木 (十一)

五百川知子

猫と枕のはなし

ドラメリア

…… 編集後記



柳父章さんのこと

奈良 敏行

(定有堂 店主)

枕頭の「がらくた箱」には、タブレットの充電器などとともに文庫本が二冊転がっている。『使徒行伝』岩波文庫と柳父章『翻訳の思想』ちくま学芸文庫だ。なんとなく関心がこのあたりから離れられない。

柳父章さんには、二十代に「寺小屋教室」という自主講座で師事するところがあった。柳父さんは「翻訳論」という分野を切り開いた人で、わたしは柳父さんを入口として「言葉」に興味を持った。

今年の年賀状に、「時代が過ぎますね！ お元気で章」と書き添えてあった。こころの中で、ご本を読みつづけています、と応じた。二月二日の朝日新聞に訃報があった。八九歳一月二日死去とあった。十数年前にすでに墓地を購入されており写真も拝見した。著作者の霊園だった。そこで眠られるのだと思った。生涯独り暮らし

だった。考えつづけることだけを選択した人生だった。

京都で一緒に書店めぐりをしたこともあり、学者の視点で棚を見る目に立ち会ったのが、新鮮で貴重な体験だった。

中心的な著書は法政大学出版局から十一点出ている。

担当者とのご縁で、定有堂には昔から「叢書・ウニベルシタス」が欠けることなく入荷してくる。

「寺小屋教室」の出版部からは、『現代日本語の発見』1983が刊行されている。この出版部は、のちに「光世社」へと発展したが、いまはもうない。高校教科書やNHK講座に発表したものが中心で、一般向けなので、わたしにはなじみ深い。

《ものを考えるということの働きは、ことばを組み立て、文を作っていくという工夫のうちにある》（ことばの日常）

一言でいえば、「ことば」「文」「思考」に油断するな、ということだ。

岩波新書の『翻訳語成立事情』1982は広く読まれた本だが、刊行時定有堂教室「読む会」の主催で講演会にお招きしたこともある。「ことば」を翻訳するのだが、日本に存在しない概念を担ったことばをどう翻訳するのか？という問いが出発点となる。似たような語でも、翻訳元のことばと翻訳先のことばの概念は一部しか重なら

ない。

要は、ここに勘違いの源がある、ということだ。このズレが社会レベルになると大変なことになる。戦後民主主義の理念のもとに育った世代は、理念と現実の相克に悩んだ。相反するとき、どちらに付くか？ むろん理念しかない。するとどうなるか？ 何かが軋む。この行きつまたりから生まれたカウンターカルチャー（対抗文化）の一つだという見方もできる。翻訳語、例えば「理念」とかは、じつは空っぽでも、なにか崇高な感じがする。柳父章さんはこの仕組みを「カセット効果」と命名した。宝石箱効果だ。きつとこれだけ外見が美しいのだから、中身はもつとすばらしい。でも空かもしれない…。

最初は「ことば」中心の考察だったが、「文」での考察も進む。2004年の『近代日本語の思想』法政大学出版局に緻密だ。

漱石の『吾輩は猫である』は画期的だという。「〜は…である」というこの構文は、明治三八年当時、まだ現れたばかりの文体だったと指摘する。三上章が述べたように、「が」が未知を受けるのに対して「は」は既知のものを受ける。これが日本語の自然な流れだ。この「は」の前に、まだ日本人になじみのない、「自由」とか「平等」が置かれたらどうなるか？ 柳父さんは、「既知強制」が発生するという。「そこから展開される論理は、既知

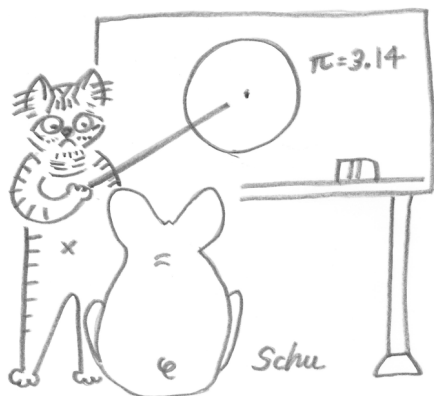
から未知へと、一方的に天下ってくる、演繹的な論理である。「論理的」というのは、西洋語の名詞中心、主語中心の構文のことなのだが、じつはこの「主語」が宝石箱で空っぽなのだという。

三人称の主語「彼」が最も怪しい。小説で出てくる場合、彼は特別な人物なのだ。「西洋近代から教えられた知識や生き方を実際に行おうとして、結果として孤立し、不幸になっていく特別な人間、近代日本の知識人である」という。もともと日本の土壌に根は存在しないのだ。神棚は空っぽなのだ。

状況の閉塞を「ことば」そして「文」に立ち還って思索し続けたのが、柳父章さんの仕事だ。

柳父章さんが桃山学院大学教授のとき、一緒に吉野山に登った。健脚で、それは我流ヨガのおかげと得意だった。午前中にステークを食べ、午後はほとんど食べない、頭脳の集中を第一とするから、とも語った。生活はとても簡素だった。一人でいて、さびしくない人だった。

2018.02.09



坂本 修一

(猫風閣主人)

新聞連載中の驚田清一『折々のことば』で、円周率を覚えて「Can I find a trick recalling pi easily?」という英文があることを知った。「 π (パイ)を簡単に覚える秘訣はありますか?」と訳せるようだ。各単語を綴る文字数を並べると、31415926となる。他にも「May I have a large container of coffee? (大きな器でコーヒーをいただけますか?)」というのもあるそうだ。こちらは意味のうえで π (パイ)とのつながりがない。

以前から「Yes, I have a number. (はい、私はある数字を知っています。)」というのを知っていた。その覚え方では「 \cdot (コンマ)」が小数点の代わりとなる。小数点以下は4桁までだ。前二者に小数点の配慮はないが、小数点以下は7桁までである。どちらにしても、学校の算数や数学で使うのだとすれば、英語圏の子どもたちにはたいへんだ。

*

数学は苦手だが、ことば遊びは好きだ。だから先のような英文を知るとうれしくなる。日本のある作家が書いた雑学もので、晩餐に招待された紳士が「a」とだけ返事を書き送り、それを見て招待した人がニヤリとしたという外国の小話があることを知った。

紳士はフランス人だったと思う。「a」はドイツ語のイエスだが、それをフランス語読みすると、「ジエグラン(大きなJ)、ア・プティ(小さなa)」となる。フランス語で「ジエ」(Je)は「私は持つ」、「アプティ」(Appetit)は「ボナ・ペティのアピタイト、つまり「食欲」という意味にもとれる。だから「a」は、「私はすごい大食漢ですぞ(喜んでお招きにあずかりますのでお覚悟のほどを)」という意味になる、ということば遊びだ。

*

日本にも、兼好と頓阿の「杵冠の歌」の贈答(『続草庵集』)や『伊勢物語』に登場する「かきつはた」の折句(アクロステイク)の歌など、いろいろな古典作品にいろいろなことば遊びが見られる。

やや深入りするが、『謎立』というなぞなぞの本に「ことば遊びがたくさん紹介されている。例えば、「道風が陸奥紙に山と書く」という出題があり、その答えが「嵐」となるようなものだ。現代のなぞなぞとは趣が異なるが、慣れるとそれなりに面白い。このなぞでは、「道風が道のく(陸奥)」で

「道風の道がなくなる」、そして「残った風の(上(紙)に山と書く」と「嵐」という文字になる、という謎解きが成立する。英文、仏文、日本古典のいずれの例でも、文字をそのままの意味でとらえていては隠れた真の意味が浮かび上がつてこない。現代日本語にはそういう遊び心が乏しくなっているような気がする。

*

ことばのことを考えていたからか、最近、哲学用語を平仮名にした題名の小説を書けば面白いかもしれないと思いついた。例えば、「あ・ぼすてりおり」とか「れぞん・でーとる」とか「えぼけー」などとという題名の小説だ。展開において誤誘導もできそうだし、字体を工夫すれば読者の好奇心もそそのめるのではないだろうか。

しかし残念ながら、私には小説を書くに値する、人間への深い洞察がない。題名はあれど中身のない小説はもちろん小説ではない。

『吾輩は猫である』と聞くところある表象が心に浮かぶ。『舞姫』と聞いてもそうだ。それは、題名を知り、内容を読み、その小説の全体に関する把握があるからだ。

*

これはひよつとすると、記号論か。

無理を承知で、無知の上に無智と無恥を重ねて書くが、小説においては題名がシニフィアン、内容がシニフィエ、その全体がシーニユということにはならないか。

丸山圭三郎という鬼才がシニユールという天才の思想のジグソーを解き、『ソシユールを読む』という書を著した。それを猫風閣主人という無才が読んで、「なんじゃこりや、さつぱりわからんわ」ということがあった。これは当然肯定文だよねと思つて読んでいるのに、文末が打ち消しで終わるという不幸に何度も見舞われ、自分でもあきれた。

読了後、ランガージュ、ラング、パロール、シーニユ、シニフィエ、シニフィアンという六つの単語だけが記憶された。すなわち前述した小説の記号論は大きな見当違いの結果だと思つて胃が痛む。お粗末の一席だ。

*

きつと何度読んでもその思想を理解できないとは思つが、ソシユールという人は晩年、アナグラムを研究していたと聞く。単なる遊びではなさそうだが、何だかうれしくなる。ちなみに、本稿のタイトル「記号について」のアナグラムに「誤記にて胃痛」がある。

(にゃんぷうかく・しゅじん)

ネタの永遠

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

ああ、二月がつむじ風のように去ってしまった。もう三月である。

焦ってもいいことはひとつもない。そう唱えてこころで全力でのんびり生きてきた身であるわけだが、どうしたことだ西暦二〇一八年、私は非常に焦っている。前頭葉では「焦るな焦るな」と言い聞かせているのに、まるで夢の中を走る両脚が言うことを聞かないように、私は前のめりの体勢になってしまっている。なんなんだ西暦二〇一八年。

三年後くらいに、つまりは西暦二〇二二年頃に発表できたらいいな、と思っていた本やコントがいくつあった。そのうち発表できるだろう、とぼんやり寝かしていた手つかずの企画たち。ところが、今年の元旦にはたと

「いや、まずい。今年中に、この企画たちは全て進めないとまずい」という無意識からの伝令が走り、現在、昨年の五倍くらいのペースで取材と執筆に明け暮れている。

現状、夏までにとりあえずテキスト上では完成させた本が三冊。一冊目は「おっぱいを巡る冒険」というもので、これはおっぱいという幻想概念(「妖怪」)の正体を空間軸と時間軸とを冒険して突き止めようという、純然たるノンフィクションルポ作品である。おっぱいはなぜ無視できないのか。おもしろそうでしょ。二冊目は「生き物の中学二年生」という企画で、生き物の「変態(メタモルフオーゼ)」の瞬間に着目した図鑑だ。ペンギンの雛は可愛くて成体は威風堂々としているけれど、中間の「中学生ペンギン」は実に思春期丸出しのビジュアルだったりする。これもおもしろそうでしょ。そして三冊目は「近未来都市トットリ」。これは鳥取市とその周辺を「近未来都市」として見立てた、ノンフィクションルポであり未来への提案書でもある。これも完成の暁には是非読んでいただきたい。どれも、まだ一行も書けていないが。サンプル原稿を書いたら消し、書いては消しの毎日だ。

そしてコント。「テクノ落語」というのを五月に東京の渋谷で発表する。三兄弟という拡張現実の技術屋ユ

ニットがいて、彼らとの合作になるのだが、簡単に言うてしまえば現状の最先端テクノロジーを使って二万年後に残る落語を書いている。ただ、それはもう落語ではないので、コントとして披露する。大丈夫です、自分でも何を言っているのかよくわかっていません。

この四つが、私の西暦二〇一八年の個人史において、おそらくは重要度の高い企画である。どれもが「いまやらなければ、来年にはできないかも」という焦燥感から手をつけてしまったものばかり。ああ、なぜ私はこんなにも焦っているのだろうか。

現行世界が終るのではないか。

そう、私はどうも、この世界がそろそろ終わると思ひ込んでいるらしいのだ。この話をすると妻からは「やめてよそんな気味悪い主張」と引かれてしまうのだが、しかし、私はどうも皮膚感覚で、この世界が終わることを半ば確信として得ているっぽいのである（大丈夫です、スピリチュアルな話とかではないです）。

で、現行世界が終了して、新世界に移行する気がしちやっているのだ。しちやっているんですよ。そりゃ焦りますよね。「とりあえず、現行世界が旧世界になる前に、やり残したことはやっておこう」と、どうも思っているのだ。たしかにこの書籍電子化の荒波が押し寄せる現在点において、三年後に「生き物の中学二年生」とかが紙

で出版できるとは考えにくい。いまやらなきゃ、間に合わない。

この前、腑に落ちるし、でも全然腑に落ちないことを、とある編集者に言われた。「ワクサカさんは、これからは自分自身のファンをもっと増やしたほうがいいですよ」どうして？「ワクサカさんの書いたテキストはいま、まあまあ『売れて』います。でもワクサカさん自身は『売れて』いません」うんうん「情報が爆発的に売れる時代は終わったんです。で、いまは思考が売れる時代です」なるほど、「だから、ワクサカさん自身が何を考えているのか、もっと発信したほうがいいですよ。ワクサカさんの思考にファンを付けて、読み手を広げましょう」ふむ…。

たしかに腑には落ちる。私もなんとなくだが情報と思考の違いを意識していて、自分の作品の中にも情報と同程度の割合で思考を配合してきたつもりだ。しかし、まさか「情報ゼロ、思考100でやったほうがいい」というアドバイスをあてられる時代になったとは。焦りが、加速していく。私はこの時代に、しがみつけるのか？

この話を受けてから、私はひとつの問いに囚われつづけた。情報と思考という、ふたつの選択肢があるとして、もうひとつ、別の選択肢を導けないか。うーん。…ああ、そうか。二週間後に答えがやっとなった。情報でも思考で

もないもの、それはネタである。

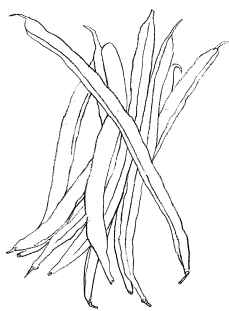
ネタだけは、時代に負けない。過去に負けない。未来に負けない。ネタは「種」の言い換えで、情報や思考のような脆弱性を孕むものではなく、ずっと、純然と、ネタである。ネタは生まれた瞬間から、永遠に、ネタとして存在し続けることができる。

「あなたにとつてノンフィクション\コントとは何なのですか？」と問われることが時折ある。私はそのたびに「私にとつてのそれは、ネタです」と答えている。コント\ネタ、というのは大方の人がピンとくるところであるが、ノンフィクション\ネタ、には不可解な表情を浮かべる人も多い。ノンフィクション\現実の切り取り、フィクション\ネタ、と往々にして解釈されているからだろう。いや、実は違うんです。ノンフィクションライティングは、たしかに現実の切り取りに基づくのですが、その切り取った布切れを縫って貼ってほめて紡いで、新しい世界の種を創る作業のことなのです。そして新しい世界の種とはつまり、ネタのことなのです。だからノンフィクションも、ネタなのです。

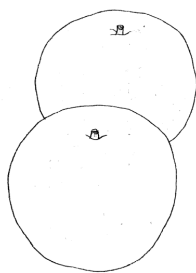
焦らなくていい、お前はネタを紡いでいるんだ、焦る必要はどこにもない、ネタは永遠にネタなのだから。前頭葉が私に語りかける。焦れ、焦るんだ、そのネタが発芽し枝葉を茂らせるような養分に満ちた世界は、もうお

前が生きている間は訪れることがこの先ないかもしれない。震える両脚が私にけしかける。

私はネタを紡ぐ。二月どころか、世界が、つむじ風のように去ろうとも。私はネタを紡ぎ続ける。



ingen



japanese pear
20世紀

北海道オホーツク紀行 (4)

芝野 浩貴
(地球探作家)

市街地の中に旧根室監獄署跡がある。網走監獄や、国外では南米の最南端アルゼンチンのフィンデルモンドの監獄跡も訪れたことがあるが、いずれも極寒地にある。

網走監獄の受刑者が旭川までの道を作ったり、屯田兵以前に町を掘り起こしたり、野菜や果物の作り方を市民に伝えたわけで、戊辰戦争、シヤクシヤイン戦争などが正しくて、何が正義かは怪しいものがある。根室駅から更に40分バスで走ると日本最東端の納沙布岬がある。灯台まで歩き、最東端の碑を確認後、歯舞、色丹、国後、択捉の4島の位置と距離と大きさを体感。歯舞島の手前にロシアとの中間帯、グレーゾーンの黒い棒が立っている。この地でアイヌ人が起こした反乱を松前藩側から見

るとそう呼ぶが、アイヌ側から見ると、西南の役の不平等士の反乱ではないが、松前藩の圧政である。監獄労働者に対しても、その当時の為政者は、過酷な労働に耐えきれずに死ねば、経営が楽になるし、生き延びて技術を持っていくなら、今後の町のために働いてもらうから、どっちにしても過酷な労働をやめさせなかった。アメリカの先住民問題もわかり。誰の視点でストーリーを作るかで変わってくる。昨日は知床連山を羅臼岳から知床岳まで右から左に眺めた。今日は知床連山を反対側から臨み、羅臼岳から知床岳まで左から右に見た。(はつきりとは霞がかかって見えなかったが)私が常に意識しているのは、実際の目で見ることと、見たものでも角度や時期が異なれば、また変わって見えるので、見たことで安心しないことである。

昆布ラーメンが食べたかったが、如何せん、こんな端まで来るバスは限られていて、40分の滞在しか許されないの、北方館で4島問題を学習し、トンボ帰りで根室駅に戻る。

釧路行きのバスの待ち時間に回転寿司で地元の食材(花咲蟹やタラコや鮭など)を食べて市内散策。釧路は今(5月下旬)が桜満開。ここ根室も蝦夷山桜が咲いている。蝦夷山桜は、花びらが散ってから葉が残るソメイヨシノ

と違い、花びらと葉は共存して同時に存在する。ある教
え子が、先生は桜前線だね、と言つてたが、今年度の紀行
を振り返ると、大きく見れば、4月の鹿児島から桜とと
もに北上して、一番北の桜の満開にも立ち会つているの
で、その話はあながち嘘ではない。根室市は納沙布岬に
向かつて尖つていくので、両側に海がある。東に納沙布
岬があり、北にラックスマンも上陸した根室港、南に花
咲蟹の花咲港がある。なので、どちらも海に向かう時は
低くなるが、東にも下つたりするので、市内の道は凸凹
だらけで、目を隠しているとどちらが北か南かわからな
くなる。来た道を3時間バスで釧路まで戻る。

翌朝5時台に起き、5、6月の日曜日だけ販売される
三千円で鈍行乗り放題という切符が使えるので、それを
使つてできるだけ移動することにした。始発に乗り、西
へ。

列車の中で1日が過ぎるだろうから、乗り継ぎの列車
待ちの間に帯広の売店で、十勝牛乳と十勝豚カツサンド
を食べた。非常食用にホエーブタのジャーキーも買った。
帯広を過ぎて、新得から新夕張までは特急以外は走つて
ないので、鈍行列車の旅の敵だが、その区間だけは特例
で特急に乗れる。その後、苦小牧を目指してフェリーに
のるつもりだったのだが、好事魔がさす。フェリーは日

曜の夜と月曜の朝は欠航だと気がついた。念のためにフ
ェリー会社に確認するが、やはり船は出ない。苦小牧の
駅通りを歩きながら下を見ると、そこは宮沢賢治が花巻
の先生の時に修学旅行の引率できた時の宿屋だった。そ
こから、その通りを歩きながら「牛の詩ができたらしい。
苦小牧から近い白老のアイヌ村に行くことにした。ここ
にはアイヌ民族博物館があり、白老村に住んでいたアイ
ヌ村を復元してある。近くにはトーテムポールがあった。
入村料八百円を払おうとした時、「荷物を事務所で預か
りましょうか?」と言つてくれた。人とは外れた格好を
しているものに声をかけてくれる人は凄いと思う。狼に
似た北海道犬が絶滅しないようにと飼つてある。その真
向かいにヒグマはいた。人に餌をもらつてるので動物園
状態で太った3頭だった。が、闘つて勝てる気がしな
かった。

博物館では、歴史や衣食住、言葉、しきたり、生死の
儀式、狩猟道具などが展示してあつた。北欧のサミ人や
台湾人などの衣装も比較展示してあつた。アイヌが実際
に住んでいた家には、鮭の燻製が多く吊るしてあり、そ
こで、イオマンテの儀式などアイヌの舞踊を観た。二千
年代からアイヌ語を絶やさないとアイヌ語の学習
会も行われている。イオマンテの本物のフィルムは札幌
の植物園のアイヌ館で生々しく放映していたのを一昨年

観た。入り口には松浦武四郎の碑が飾っており、博物館でも松浦武四郎コーナーはある。いつか、三重県の松坂市にある松浦武四郎館も行かなくてはいけない。

私が歩いている時、いつも思う3名がいる。松尾芭蕉と伊能忠敬と松浦武四郎だ。いずれも健脚で私の敵う相手ではない。松浦武四郎は、6回に分けて北海道を全て歩いて地図を作った。二万キロを数年で歩いている。わたしは2年と少して二千キロにも満たないだろう。

母を訪ねて三千里。それ以上の距離。1回目は日本海オホーツク側の海岸で函館から知床岬まで。2回目は太平洋側の室蘭苦小牧、帯広釧路を経て知床岬まで。3回目は千島樺太。4回目は国後択捉島。5回目と6回目で内陸全て。知床岬までも海岸沿いは危なく歩きにくいのに、今より海面が高かった荒い海を一周して、大雪山系、十勝岳などの山も越える。しかも、歩くだけでなく、つねに現地のアイヌ人と交流しながら、地図地形を意識して作製した。そもそもは、長崎に旅行した時に、ロシアの脅威を感じて蝦夷を守ろうと思ったらしいが、どこからその思いだけで、あの偉業が達成できるのか。バスや列車で移動する自分が情けなくなる瞬間もある。松浦武四郎の平均1日歩行距離は6.70キロ。多い時は80キロ。現代でいうと、アドベンチャーレーサの人達だ。

閉館17時ギリギリまで居座りアイヌ研究。アイヌ本コーナーもあるが、こういう時、司馬遼太郎と柳田国男の本は必ずある。イザベラ・バードは日本奥地紀行で、日光・新潟・山形・秋田・青森と北上し、函館から白老に辿り着き、自分の鞍を使い、馬に乗ってアイヌの家を訪ね回った。

アイヌ村はポロト湖のほとりにある。ポロトとは、アイヌ語でおおきいという意味である。ポロト温泉に行つて汗を流そうと思つたら、3月で閉店していた。ゴールドエンカムイというアイヌの漫画が漫画大賞をもらつてるのだが、まだまだアイヌ文化には近づかないのか、温泉が良くなかつたのかわからないが、残念。ちなみに、アイヌ語には自然という言葉を表すものはない。自然と〇〇というように分けられないから。

弥生時代のないオホーツク文化圏から関東へ。フェリーで茨城の大洗港に着き、ひたち海浜公園のネモフィラを見ながら、今度は日本人の南からのルートを探ろうとしていた。

イヌの名は (続き)

ムラカミ ヒロミ

(フライング・ブックマン)

山中峯太郎の「見えない飛行機」は少年向け間諜小説。正男少年と愛犬が某国スパイ団に奪われた新発明の設計図と誘拐された研究者の叔父を救い出すお話。自動車、偵察機、水雷艇による追跡劇で、最後は連合艦隊のお出ましと大盤振る舞いの軍事小説である。愛犬の名はタケル。正しくは、猛号という軍用犬。銀茶色のシエパードで、少年の命令しか聞かない。人間の言葉を()書きとはいえ、喋るところや、車の中から行き先を指示するなど、少々？な部分もあるが、まあ昭和一〇年の作品であるし、勢いで読めばよいのだから、細かいことは言うまい。

(承前)

わが江戸川乱歩に、猫の眷属が出てくる作品は結構ある。「陰獣」は、そのものズバリのタイトルだし(ただし、猫そのものは出てこない)、少年探偵団ものにも、二十面相の部下(愛人という説もある)の猫夫人と、その子・猫娘が登場する。「虎の牙」という作品もあるし、名作「人間豹」も猫族だろう。後者は猫族の不気味さ、残酷さ、いやらしさをよく描いて間然するところがない。翻つて、犬の方は分が悪く、ほとんど探偵七つ道具扱い。即ち、「人間豹」で、犯人の車を追跡するために、シャーロックというシエパードが借りてこられる。少年ものの「塔上の奇術師」にも同様の活躍をする黒のシエパードがいるが、こちらは名を「五郎」という。乱歩にしては珍しいギャグといえるべきか。

軍用犬で思い出したのが桑田次郎の漫画「軍用犬ヤマト」。マレー方面の作戦で軍用犬と調教師の一等兵が活躍する。犬はシエパード。彼は後に名作「超犬リープ」も描いている。有吉京子の「白い森の決闘」は、猟師の少年と猟犬カムイが両親を奪ったヒグマに復讐する話。バレエ漫画の第一人者も昔はこんな作品を描いていたのである。犬を描いた漫画は夥しいので、有名な所だけチョイスすると、石川球太「魔犬ムサシ」、山田えいじ「ベスよおをふれ」、手塚治虫「フライング・ベン」、矢代まさき「ボクはイヌになった」、横山光輝「地獄の犬」、谷口ジロー「ブランカ」等々。

エニード・ブライトンの少年探偵もの「五人と一びき」の犬

はスコッチ犬で名はバスター。これは、NHKでドラマ化されており、名前がホームズに変わる。

そういえばベバリー・クリアリーの「ゆかいなインリーくん」が拾ってくるよれよれの犬は原作ではリブシー（スベアリブのリブ）だが、翻訳に際してアバラーとなった（駄洒落である）。犬種は、「何なに種というような犬ではありません」とある。挿絵や初版本の表紙を見る限り、テリア系のように見えるけれど。こちらにも「わんぱく天使」の題名でドラマ化、名前も踏襲したが、なぜか、アバラなど見えそうにないラブラドール・レトリバーが出てきた。

ドラマで思い出したが、「海の次郎丸」という時代劇があった。大佛次郎の「ゆうれい船」が原作で、詳しい内容は忘れてしまったが、主演の中村光輝が次郎丸、その愛犬が太郎。犬と人間の名前が逆様だな、とからかわれる場面があったことだけ覚えてる。（ちなみに原作では、犬の名は「白」確か少年画報か何かに、庄司としお（夕焼け番長）の作者だの漫画版が載っていたはずだ。

日本の犬の名前にはポチが多いが、これはフランス語の「ポチ」に由来すると紹介しているのは庄司薫。昔、「赤頭巾ちゃん気をつけて」で読んだんだよなあ、と思いつつ探してみる

も見つからず、最終的に著書を全部ひっくり返して、やっと「僕が猫語をしゃべれるわけ」の中に、わずか一行ほど載っているのを見つけた。やれやれ。

しかし、そうなると「花咲爺」の犬の名前はどうかなるのか。原典は室町期の成立、版本は江戸時代で名前はまだない。命名者は明治唱歌の作詞者・石原和三郎。当時、ポチは非常にモダンな名前であったそう。

レコードや音響機器のメーカー、日本ビクターの商標が蓄音機に聞き入る耳の黒い白犬（ジャック・ラッセル・テリア）であるのは周知のことで、犬の名前がニッパであることも、トリビアとしては余り新味がない。しかし、彼を題材にした絵本やレコードが出ていたことは大方がご存じあるまい。「ニッパちゃん」という絵本が三越左千夫の文、小田忠の絵で日本ビクターから、また「可愛いニッパ」「小犬のニッパ」を始めとする童謡SPが昭和二十年代に一〇曲以上発売されている。「ニッパちゃん運動会」とか「のクリスマス」などに交じて「のオリンピック」というのもあり、恐らくヘルシンキ大会を当て込んだのだろうが、中身は運動会レベルの至つて長閑な歌である。

ヒップホップと回転寿司

坪井日記 ②

齊藤仁昭

(長崎書店)

ヒップホップはサンプリングの技術とともにその音楽性や文化を発展させてきた側面がある。サンプリングとは、ごく端折って言えば、他人のレコードからビートやフレーズ、音色などを拝借しループさせることであり、その材料をもとにラップのバックトラックを創り上げていく。楽器や高額な機材を持っていなくとも、音楽の教育を受けていなくとも、嗅覚でネタ（サンプリングの元になるフレーズやレコードそのもの）を掘り出し、センスとスキルでそれらをまとめ上げることでフレッシュなトラックを作っていく。ヒップです。レコードを掘ることで過去のミュージシャン達への敬意が生まれたり、膨大な音楽コンテンツの知識を得ていくのにも役立ち、ヒップホップの音楽性も拡大していったのではないかと思う。

しかし商業的な成功とともに著作権の問題にぶち当たり、サンプリングをせずにトラックを作る必要が生じた。色々な地域で打ち込みによるビートが発展していき、ラップのスタイルも様々に派生していった。自分は80年代の日本のラップミュージックからヒップホップに嵌ったくちなのでどうしてもサンプリングありきのトラックに耳がいきがちだった。元ネタを探す楽しみがオタク心をくすぐり、日本の文化とも愛称が良かったのだと思う。そんなだったものだから、新しいラップミュージックにおける、サンプリングの使われていない打ち込みのチキチキしたビートや、シンセの音色が大仰に聴こえてしまつて苦手だと思つていたし、むしろ否定的に見てしまつていた。しかしそれは自分がおじさんの入口に立つていて、新しいものを古い感性で拒絶していただけのことだった。

韓国のラッパー Keith Ape が日本のラッパー Keith Aと共演している『It's Ma』という曲を聴いたとき、トラックの重さ、暗さ、不良っぷり、ラップの新しさに目を見開かれた。この曲ができるまでの世界じゅうでのラップミュージックの発達が垣間見え、耳を閉ざしていた自分を恥じた。圧倒的なコンテンツポラリーさ。いつのまに自分は懐古主義者に成り下がっていたのか。若者の音楽は

常にすばらしい。最近はゆるふわギャングとMissesをよ
く聞いています。

*

昨秋に坪井という町に引つ越した。仕事で疲れて自炊
が面倒な仕事の帰り道、今まで住んでいた家の近所には
なかった回転寿司屋に寄ってしまうことがある。寿司屋
だからと言ってシャリに刺身が乗ったものが出てく
るかと言うと、もうそんな時代は終わっていた。何が乗
っているか。焼いた魚にチーズやサラダが貼りついてい
るものならまだしも、生ハム、牛肉や豚肉、鶏肉を焼い
たもの、ハンバーグ、コーン。何でもござれだ。更には、
カレー、うどん、ラーメン、牛丼、パン、アイスクリー
ム、ケーキ、コーヒ―：もう寿司でさえない。一体どう
してしまったんだ。どうかしてるじゃないか。

そう思ったときヒップホップでの自分の失敗を思い
出した。いいじゃないか何が乗っていいようが。回転
するレールの上、皿に食べ物が運ばれてくるのであれば。
色々なメニューを食べてみた。けどどやっぱり刺身のお
寿司が食べたい：もうおじさんでもいい。普通のお寿司
が食べたい。サンプルリングの音色を懐かしむようにそう
思った。

そんな話を誰かにしていたら、とある回転寿司チェー
ン店では魚の寿司へと原点復帰しつつあるとの噂を聞い

た。そこへは車じゃないと行けないので次回の休みにで
も行ってみようと思う。

*

寒い一日だったが 今日には楽しかった
あの子怒り心頭で それはスツとした
目にもとまらぬ速さで 道が掘り返されて
リポビタンD飲んでる 現場のおじいさん
肩の力がまず抜け 旅をする気が失せた 誰か来てよ

今後仲良くなること それはありえません
奇跡起これとお願い する気さらさらない
思い出話はさておき 飯をたらふく食べる
リポビタンD飲んでる 現場のおじいさん
道を作るぞ すこぶる快調
ちよつとでいいから ちよいと見てよ

集まれよ 誰でもいいから
集まれよ おじさんでもいいよ

(ケバブジョンソン「おじさん」作詞：橋本悠)

私も言いたい翻訳語



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

定有堂店主の奈良先生と知り合った場所は、鳥取環境大学の非常勤講師室だった。職場を離れても私にとって尊敬する先生なので奈良先生と呼んでいる。その奈良先生が先生と呼んでいらつしやる柳父章氏の著書『翻訳語成立事情』（岩波新書）を紹介された。今年の一月、もうお会いできないところにかかれてしまったようだ。

外国語から日本語に翻訳されたことばについて、どのようにに訳され、造られ、使われてきたか、用例とともに柳父先生の考えが述べられている。取り上げられた翻訳語は「社会」「個人」「近代」「美」「恋愛」「存在」

「自然」「権利」「自由」「彼、彼女」である。奈良先生は、ロシアで生活したことのある私に今回のお題を下

さったが、難しすぎた。

「美」といえば、モスクワの観光名所「赤の広場」の「赤い」というロシア語のクラーズヌイは、古くはクラシーヴィ（美しい）という意味であった、と何度もロシア人から聞かされた。共産主義を表す色ではなくて、美しいという意味、だから「美しい広場」とロシア人は誇る。私は愛する「アイ・ラヴ」は「ヤ・リュブリュー」、読書が好き（詩が好きと言えばさらによい）、演劇が好き、歌や踊りが好き、とリュブリューの後に好きなものを言えば共通の話題として広がっていったが、「あなたが好き」とは口に出せずに帰国してしまった。

ロシア語文法では日本語の「てにをは」にあたるところを名詞の語尾変化（格）で表すため、一つの単語の形が変わる。しかも、「ある」と「ない」の場合でも違ってくる。本がある時は「クニীগ」、ない時は「クニীগ」、その存在の有無が大事なことから、ある時とない時にその形が同じであるべきではない、という主張をしているのかどうかはわからないが、文法用語の中で私はこの「否定生格」が一番好きだ。

名詞に性の区別があるロシア語では、この人、あの人

も女性か男性か名詞と動詞の語尾ですぐにわかる。ものに対して「彼」、「彼女」の意の三人称代名詞を使う。柳父先生は、よけいなことばとしての「彼」「彼女」とおっしゃっている。なるほど、考えたこともなかった。ロシア語を話す時に常にヤ、ヤ、ヤ、と言っていたので、日本語でも「私が」「私は」としきりに主語を使っていた。この一人称がよけいだと気付くには時間がかったが。

柳父先生の著書から離れて、私の気になるロシア語をひとつ。「ダーチャ」である。三十年ほど前にロシア語を習った時、日本語では「別荘」と記憶した。そして日本のお金持ちが所有する別荘をイメージした。さすが共產主義国、みんな別荘を持っているなんて豊かなのだと思った。ソ連崩壊後に現地に滞在して一番に見たかったのが、この「ダーチャ」であった。ついにその日が来た。週末に知人のダーチャへ連れて行ってもらうことに。車で2時間、郊外というよりも田舎の村はずれに垣根で囲われた一画があった。野菜畑と小屋のような建物が目に入った。えっ？早速、キュウリやナス、トマトなど野菜を収穫する作業にとりかかる。人手を喜ばれて畑も耕した。週末の休息とは肉体労働だったの？屋外のトイレは大切な肥料の保管場所、ドラム缶にたまった雨水は無駄

にできない。自給自足の必要に迫られて食料を確保している場であることと、食料不足の時期に生き延びることができた理由がここでわかった。

「自然の」という意味のロシア語はいくつかあるが、「ナトゥラーリヌイ」をダーチャではよく耳にした。まさに自然の大地から育ったものについてのことばなのだ。このことばが「貨幣の」の反対語として使われた時にはわからなかったが、お給料を現金ではなく現物（パンや穀類、自社の販売商品）でもらった時に初めて理解できた。ダーチャは実態がわかってきて「別荘」とは訳されなくなった。菜園付きセカンドハウスとか、今ではロシアの富裕層が優雅に暮らすための「別荘」を建てている。冗談で「宮殿」と言っていたロシア人もいたが、「ダーチャ」に代わる別のことばが造られるかもしれない。そして、日本ではそのライフスタイルとして「ダーチャ」が原語のまま受け入れられつつある。

柳父先生が取り上げられたこれら十の日本語のことばについて、自分はどうのように使っているか考えてみたくなった。

鳥取あれこれ その十九

内田克彦

(地域研究家)

(承前)

ところで、とりネットの「予算編成過程の公開」頁を見たら、県立図書館が「郷土情報発信事業」の中の「郷土文学者情報の発信」として、「『郷土出身文学者シリーズ 加藤朝鳥』の刊行」を平成三〇年度当初予算要求しており、大いに喜んだが、「財政課処理欄」に「新規発行は認めません。」とあり、ゼロ査定であった。どういうことなのだろう。鳥取県財政はそれほど厳しい状況なのか、それとも他に理由があるのだろうか。

なお、前回「『青鞥』の関係者で、生田長江以外に、鳥取ゆかりの人物がいなかった」と書いていたが、「生田花世」がいたことに気がついた。『郷土出身文学者シリーズ』⑩鳥取ゆかりの女性文学者』の第三章「生田花世」から抜き書きする。花世(旧姓西崎)は、みど

りと全く同じ一八八八(明治二二)年一〇月に徳島県に生まれた。二十歳になる前の一九〇八年、『女子文壇』4月号に新体詩「産土神」が三等入選で掲載される。一〇年三月上京。『青鞥』創刊の翌年一九一二年に、らいてうに社員になりたい旨の手紙を送り、一三年一月から発表する。翌年一月「恋愛及生活難に対して」を発表、この文章に感激した生田春月から求婚される。三月一日から同棲、同五日、生田長江らの列席のもと、春月との結婚式を挙げる。春月二二歳、花世二五歳である。『青鞥』では執筆するだけでなく、一六年二月の廃刊になる直前は事務一切を引き受けた。

みどりは、一九〇七年十八歳のとき、『女子文壇』1月号の短編小説欄に「愛の花」が一等入選しており、デビューの仕方といい、結婚の仕方といい、花世とみどりの、軌を一にしたような歩みに驚いてしまう。

さて、みどりである。朝鳥と同棲の後、一九〇九(明治四二)年七月、朝鳥の早稲田卒業を期して結婚式を挙げた。朝鳥二二歳、みどり二十歳である。翌一〇年七月結婚届を出し、九月長男を産む。一一年五月、朝鳥が岩野泡鳴の紹介により「大阪新報」記者になり、大阪に移る。七月、泡鳴の同棲相手の清子に届いた『青鞥』創刊のための入社勧誘状・趣意書・規約を見て、社員として

参加。九月に発刊された創刊号には、社員名簿の中に「加藤みどり」の名が載っている。一二月、一卷四号に小説「高窓の下」を初掲載。以後、一六年二月の廃刊までの約五年間、頻繁に小説・評論を載せている。

朝鳥・みどりは、大阪には一三年九月頃までの二年数か月いた。この間特筆すべきは、大阪に「試演劇場」を結成して、大阪生え抜きの新劇人の手による最初の上演活動を行ったことである。岩田ななつ氏の論文「加藤みどり資料（その1）」より、抜き書きする。

一三年四月八日から一二日にかけて、イエーツの詩劇「幻の海」を宝塚の婦人博覧会会場で上演した。みどりは、女王のデクトラ役である。三月二三日付の大阪日々新聞には、上演に向けた練習風景を取材して、揶揄するような記事が載っている。

イブセン殊に新しい女のみどり子女史は最も熱心な主唱者で子供の襁褓を洗ひながら「吾れは女王なり」奥さん御飯が焦げますよ。（岩田氏の論文から筆者により再引用）

舞台となったパラダイス館は、前年最新式の水泳場として作られたものであったが、当時男女の同浴が許され

なかつたことが影響して不入りだったため、そのプールに板を張って広間にして利用された代物であり、博覧会の余興としての上演であった。みどり評は厳しく、社会には何らの反響も残さずに終わった。

この記述を読んで、今年一月一三日に放映された「ブラタモリ」の「宝塚くナゼ宝塚は娯楽の殿堂になった？」で、このプールが取り上げられたのを思い出した。ネットの中から見つけた宝塚市編集・発行「宝塚温泉物語」には、「少女歌劇の始まり」として、「その後始末に困った。ちようどそのころ結婚博覧会とか婦人博覧会、芝居博覧会、家庭博覧会等々、シーズンにはそれからそれと、何等かの客寄せを催しておったから、とりあえず水槽に板張りをして広間に利用しておったのである。（中略）〔大正〕3年4月1日には婚礼博覧会が始まり、その余興として宝塚少女歌劇の幕が開きました。」とあった。

みどりは、現在の宝塚歌劇団の草創期となる一九一四年四月に遡る一年ほど前に、同じ会場で女王役を演じていたのである。

（以下、続く）

名曲と向き合ふ為に

力強い仲間 に訊く

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

1

19世紀露の作曲家ムソルグスキーの代表作に、友人の建築家ハルトマン※1の遺作展から着想を得て書いたピアノ曲「展覧会の絵」があります。その厚く重い響きと憂鬱で暗い表情の中には、西欧音楽には無い独特の雰囲気が出ち込めています。この作品が世間に広く知れ渡るようになったのは、仏の作曲家ラヴェルの管弦楽編曲※2によつてでした。しかしパレットから多彩な色をまき散らしたようなこの華麗な編曲は、原曲にある露のメランコリーを漂わせた風土を思わせるより、寧ろ色彩感豊かな仏の絵画を眺めているような感を抱かせます。この事は、結局人間は、自分が根ざす民族に育まれた感覚でしか対象を見る事が出来ないものなのだ、と云う事をよく示しています。―以上はN某氏の或る新聞連載コラムで「人間の感覚は民族を離れられない―『展覧会の絵』とラヴェルの編曲―」と云う題。一見良識的な案内のや

うに見えるが何とも暴論ではある。

……以下、順ヲ追ヒ検証シテミヤウ。①「展覧會」ピアノ獨奏版ハ元々カナリ汎ク知ラレ全露ノピアノスト達ガ挙ツテ「18番」ト頻繁ニ演奏。聞キツケタ仏ノ作曲家モ「コヒツヲオーケストレイションスレバ」ト思ツタ次第。ゲルトマン※1遺作展ハ特ニ露云々ヲ大々の二謳フデモ無ク、登壇ノ面題モ「キエフの大門」ノ如キ物許リデハ無イ。「テユイルリー」「リモージュ」「カタコンベ」ト云ツタ外國の地名等、ソシテ幻想的ナルモノ多数。コレハポイント！

2

然モ、モノトーンニ描カレタ原曲ニハ、露的ナニユオンス、フリーズ散見サルルガ、此ノ作家ガ「さういふ風にしか觀られなかつた」ノデハ無ク「力強い仲間（五人組）」ノ一員トシテ、非西欧・國民樂派ヲ標榜シテ居タ立場カラ露的肌合ヒモ意識的ニ盛り込ンダニ過ギナイ。

3

ラヴェルノ管弦樂法モ相当マニエリスティック、技巧的ナモノデ其ノ「効果絶大ナル為更ニ國際的知名度」ガ上ツタノダガ、ヨク見テミルト「殊更フランス的ナ響キ」ノ聴カレルモノデモ無イ。筆者モ解説ニ書イテ居ルヤウニラヴェルハスペイン、バスク地方！生レ。エキゾシズム、オリエンタリズムモ主要テーマニ掲ゲル作家、何処

カラ「純フランス風」ト錯覚ガ生レタ?...つまり筆者の

並びたてたお題目は甚ダ客観性ヲ欠ク氏一流ナル所謂

「思ひ込み」ノ産物、従ツテ其ノ結びガ狭ク貧シヒ方向

へ導カレザルヲ得ナイノモ些カ残念。ダウモ教養原理主

義者達ハ結論ヲ急ギ過ギル。民族主義的テーママ題材ヲ

扱ふ洗練サレナヒ普遍的ニハ程遠イト云フ短絡的公式

ニ則ツテ作品ヤ作家ヲ貶メテシマフ。抑、此の作品は純

ロシア風の風土や色彩が主題では全く無ひし、其ヲ編者

がフランス風に換へて了つた訳デモ。音楽、特に器樂は

絶對的抽象である。作品に就ひて書くなら其の周りに雑

学の厚化粧ヲ施シ主観で決めつけるのは止めやう。唯、

スコアだけに依りシンプルに作者の魂に、斜に、では無

く正面からそして襟を正し向き合ふ事こそ肝要。

此の作品の何が素晴らしひ? って。ムソルグスキーが

友人ヲ悼み、葬儀の席では無く遺作展に赴いて故人の目

を通しファンタジーを共有しモノトーンの独奏曲を創り

上げた事。次にそれが海を渡り外国・次世代の作家の心

に留まった: 此処からもう一つのファンタジーが生まれ

た! 今度はカラフルで交響的な虹の筈だ・さあ僕らは、

誰に何云はれる事もなく自分の心に自らの物語(ストー
リア)ヲ描き、其の脚で悠々「キエフの大門」ヲ潜り往か
う!

3

※1 ハルトマン、ゲルトマンは露語読み

※2 一般的にラヴェル編曲と云ふクレジツトが流布してゐるが、オーケ

ストレーション...M. ラヴェルと云ふべき。

今月の2枚 ○Mムソルグスキー組曲「展覧會の繪」P. 独奏版 (1874)

A ヴァイセンベルク P. サルツブルク音楽祭フライ w. 1972 Orfeo

○同「同」M. ラヴェルのオーケストレーションによる管弦楽版 CMジ

ユリーニ指揮ベルリン・フィルハーモニー フィルハーモニーライヴ

1977 ベルリン

画. A. T



Модест Петрович
Мусоргский
1839-81

2018. 01. 1 ~

牝鶏

スザワ マリコ

(考古系もの書き)

本の内容は、単純に述べるなら、師匠である折口から同性愛を迫られた弟子の葛藤の記録だ。

折口の弟子で後の養子（現代なら同性のパートナーである）藤井春洋が出征することとなり、筆者である加藤は春洋の代わりとして折口の世話を頼まれる。折口の師弟関係は濃密で、仕事や家族よりも師弟関係を優先させられる。加藤は他の弟子たちからも「春洋の代わり」として扱われ、旅先でも、気が付くと折口の横に床を並べて寝ることになっている。

夜、眠っていた加藤の布団の上に、突然折口がのしかかってくる。折口は言う。

「春洋は僕の好きなひとをよく知っている」

この言葉を聞き、加藤は猛烈に抵抗しその場から出て行こうとしたが、必死で止める折口の説得に折れ踏みとどまる。

その後、折口と距離を置こうとするが師弟を辞めることができず、ズルズルと関係は続き、仕事を幹旋さあれたことでいつの間にか同居してしまっている。

師はもう何もしないと言ったから、と自分に言い聞かせる一方で、師以外との関係が希薄になり、折口からの好意は明らかになくなっていく。その意思が変わったとは思えず、文中にはジリジリとした緊迫感が漂う。

ある時、加藤は折口の師である柳田からこう言われる。

喉元に刺さった魚の小骨の様に記憶に残る本がある。タイトルは『我が師 折口信夫』。この文章を読んでくださったっている方のほとんどが、読んだことも、筆者である加藤守雄という男性のことも知らないであろうが、折口信夫についてはご存じだろう。柳田國男の弟子で、「まればと論」など折口学と呼ばれる独自の民俗学論を展開した、歌人釈道空としても知られる人物だ。

初めてこの本を読んだのは、大学の民俗学の授業だった。といつてもその講義の先生はテキストとして加門七海を選んでみたり、ウルトラマンゼンを見たりする大塚教授らしからぬ俗なセレクトで有名だった。この本についても、柳田國男に関する本を読んでいる途中で折口信夫の同性愛について述べた際に、補助的に、揶揄的に使ったものだった。

「加藤君、牝鶏になつてはいけませんよ」

折口はこの言葉を聞いて嘆く。柳田先生のおっしゃることはよくわからない。同性愛は男女間の愛情よりも純粹なもので、師弟というものはそこまでいかないと完全ではないのだ、と。

これを聞き、もう最後だと思つた加藤は、遂に師の元から出奔するのである。

この本の感想として、後の住み込み弟子である池田弥三郎が「覚悟はしていた」と述べたことを引用し「春洋の代わり」になるとはどういうことか分かつていたはずだろう、という意見を見かけた。

文中からも、折口を師として慕っていたこと、師と藤井春洋の関係を知らなかったわけでないことが分かる。私が思う答えはシンプルだ。

想定していたが生理的に受け入れられなかったのだ。

恋愛の不幸はお互いの認識の違いから来る。

尊敬する師にとって、自分が「弟子」であり「牝鶏」であつたこと、春洋の様に自分を犠牲にして師を受け入れられなかったことが、お互いに傷を残した。晩年になり、ようやく書くことが出来るようになる程度には、筆者である加藤は師からの視点に傷ついたに違いない。

けれど、彼の最大の悲劇は、その絶望がその鮮度のまま世間に伝わらないことかもしれない。

何故なら、女性にとっては、よくある話だからだ。

男女の不幸はどこから来るのだろうか。

女性専用車両というものの存在。不審者情報の紙が女性の机の上だけに置かれる風景。女の子が女親から足を開いて座ると怒られる理由。それは女性にだけ受け継がれていく危機感と自衛の意識であり、世の中から突きつけられる牝であるという逃れようのない事実だ。半ば諦めて、私たちは生きている。

他方、大々的に報道されないが、男性の痴漢被害者も確かに存在している。心の傷は、覚悟のないまま牝鶏にされてしまった彼らの方が深いかもしれない。



Horseradish

なんでもない話

伊達文

(人生休憩中／ノージャンルイベント)

先日、用事で上京した大学時代の友人と二時間ほどお茶をした。

私は今、人生休憩中なのだけれど、かぎられた時間の中で、彼女の話も聞きたいし、状態を本当に伝えるなら二時間でも足りないので、長々と私の困り話をしたくはなく、部分的に話しつつ、ささいな楽しい話をぽつぽつと広げて重ねた。

困っている具体的なことを話さなくても、その人と共にいて楽しいということは、それだけで素晴らしいことだ。それだけで喜びだ。困っていること自体がなくならなくても、困りながら生きていく元気が、スプーン何杯分か、増える感じ。

結果として助かっているけれど、相手が助けているでもなく、助けられているのともちよつと違う。問題を一度に解決するのではなく、この先何度も自分に力をくれ

る、生きていく強さが自分の中に小さく芽生えて育っていくこと。

私のちよつとした物事のとらえかた、すごしかた。そんなことを、友人はずつと面白そうに聞く。役に立つ知識や学びになるようなことは何も話していなくとも。自分の日常を話すだけのことが相手の喜びになっているのを見るのは嬉しい。自分が何の苦勞もしないでしている、自分が生きていくこと自体を、向こうもまた何の努力もなく喜んでいく。そこに助けや依存はなくて、ただ、私たちが違う人間で、たまたま相手のしていることを面白いと感じられる相性だった。喜びを生むのは、それだけのことだったりする。

病院に行つて治療して楽しさを感じられるようにしていくのは専門的な知識を持った専門家のすることで、先に「楽しい」を作ったり、結果的に自信を芽生えさせたりにするのは、身近な人のできることなのだと思う。

思考をこんこんと語り合う友人もいるけれど、彼女とはもつぱら、そのときどきにどちらかが好きな場所へ出かけたり、近況を話したりと、考えよりも出来事を共有してきた。けれど、多くを語らなくても、一つ一つの楽しいことを共有してきた蓄積から、この人はすごくよく私を知っているなあ、と思うことがある。私が何かを新しく始めたときに、私とその行動によってどういう意味

のことをしようとしているかを、私よりもつかんでいた
りする。深く思考を語り合うだけが、思考を触れ合わせ
る方法ではない。

人生の根っこの価値観を共有していれば、以後ずっと、
そのときどきのしていることや個々の考えが変わって
も、なんでもない「楽しい」を共有し、大事に想いあっ
ていられる。

久しぶりに会った彼女は相変わらず、世間の流行にも
技術の進歩にも引きずられることなく、かといって強く
主張して世界を変えようと望むのでもなく、ただ淡々と
彼女のペース、彼女の願望を守っていた。自分でいる能
力のすごく高い人だと思し、だから相手を相手のまま
いさせる能力も高い。自分の意見がないから押しつけて
こないのではなく、自分の意見があるから他人の意見に
侵入してこない。

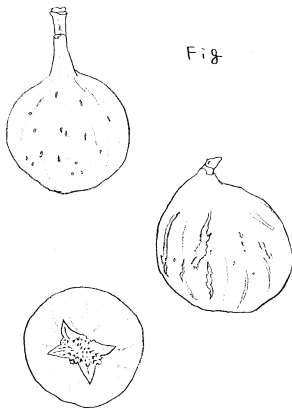
能力が高い、と言うと優劣のようだけれど、要は、彼
女も私も、そういう文化を選んだ。そうして、違い続け
ながらこの世界で一緒に生きてきたのだと思う。こんな
カフェが好きだなあといった喜びを共有し、違いに出会
えば、「この人はこうなんだな」と思った。だから、自
分とは違う相手の楽しさを喜んで聞ける。

ふり返れば、学生時代から私たちは淡々としていた。

同じ授業をとつても隣に座るでもなく、何でも報告する

ということもなく、ただそれぞれ自分であることを楽し
んでいた。そしてそんなそれぞれの時間を持ち寄るよう
にして、一緒にいる時間を楽しんだ。

同じにはならない、けれど相手といるときには、相手
が大事にしているものを大事にする。違うから、そして
違っていて大丈夫な関係だから、わけあえるものがある。
会話をするときは、主語を大きくせず、自分を主語にす
る。それぞれ一人の独立した人間と人間でいるために。
それを互にとつとつとやってこられたことは、一つの
幸福な出来事。



Fig

書くこと

中山 早織

(産婆 駆け出し)

文章を書くことについて、最近ずっと考えている。ずっと長いこと手帳に日記を書いていた。人に見せる前提ではないもの。何を食べたとか友達にこんなことを言われたとか。自分だけの世界はとても自由で、そこでは汚い自分も気取った自分も、なんでもありだ。でも、外には自分の内面的なことを見せなかった。

転換期が訪れた。続けることこそ美学だと思っていた私が、初めて途中で投げ出したことがあった。しんどくてもう無理と、責任を放棄した。人生終わったと思った。一度何かを投げ出した人は、今後の人生ずっと中途半端だと思っていた。今考えるとあほすぎるのだけど、当時は真剣にそう思っていた。そして、いざ降り投げ出して見えてきた景色は、びっくりするほど穏やかだった。そ

れが素直な感想。でも、それを自分なりに納得して消化することがなかなかできなかった。

だから、カウンセリングに通ってみることにした。心理学をかじっていたので、臨床心理士さんのお手並み拝見、的な感じで。憎たらしい子。素直に助けて、が言えないのは幾重にも鎧を着固めていたからだど、その頃はわかっていなかった。そのカウンセリングの場が、とても心地よかったのだ。今まで、人に自分のことを話すのが苦手だった。人様の時間をもらうなんて恐縮。でも心理士さんは私の話を聞くのが仕事だから話しても良いだろう。その人は何を助言するのでもなく、私の話を整理してくれた。それってこういうこと？と言われると、「ああ、そうか」と思ったり、「いやいやそうじゃなくて」と思ったり、とにかく言語化して思考を整理することを助けてくれた。特段その人が好きなわけでも、信頼していたわけでもないのだけど、週に1回のその時間がとても楽しみだった。

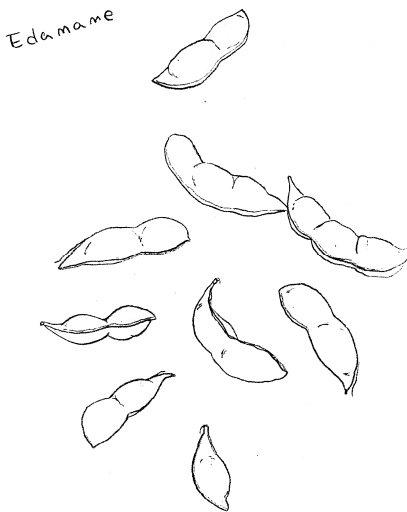
その人に、ある時こう言われたのだ。「あなたは、いつも頭の中でいろんなことを考えているから、頭の中がパンクしそうになっている。だから、なにかそれをアウトプットする場があるといい。」

ああそうか、と思った。だからブログを始めたのだ。

誰にも見せない、秘密のブログ。もう十年近く前の話だ。私の頭の中を整理するための、大事なツール。絶対に誰の目にも入らない紙の日記とは違い、誰かは見られるかもしれないネットの上に自分をさらけ出すということとは、大きなことだった。そこに毎日思ったことを書いた。頭の中がクリアになってとても楽しかった。目の前の世界が明るくなったように感じた。そうしているうちに、信頼する人にはそのブログを見てもらいたくなってきた。ひとりまたひとりと、友人にそのブログを伝えていくうちに、少しずつ自分のことを人に話すことができるようになってきた。そのうちにカウンセリングにも行かなくなって大丈夫になった。

文章を書くことには、人によって様々な意味合いがあると思う。いくらでも自分を発信できる今だからこそ余計。自分の活動を人に伝えたり、取材したり。気付けば私も、時を経て自分の文章が人の目に触れる機会が増えていくうちに、いつのまにか「うまく書きたい」という想いが強くなっていった。うまく書きたい、にとらわれていたら、周りの上手な人と比べてしまったりして、段々と文章が書けなくなつた。ことばが出てこない。うまく書けないから、もう書くのをやめようかな、と思つた。ぐるぐる思い悩んで、いろんな人に相談して、昔のことを思い出したりして、ようやく自分なりに合点がいった。

私にとって文章を書くことは、苦しいほど目まぐるしく動く自分の頭の中を整理すること。自分が自分らしくいるためのツール。うまく書く必要なんてない。これでは本末転倒だ。うまく書く、を手放してみる。それができないならば、また紙の日記に戻ればいい。そう思えたら、とても久しぶりに文章を書くことが楽しく思えた。そうだ、思い出した。私は文章を書くことが好きだった。



妄想小説

土質 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

博多で隠居する老いた両親を年一回訪問する際の、滞在中の無為の日々と、それを打ちやる為の、近所の大濠公園に於けるジョギングについては、先にも書いた。

池の外周(2km)を五回走るのは、朝起き抜けだが、暇を持って余して午後にも散歩に訪れる。今回(二〇一七年十一月)は修復中であつたが、なかなか志の高い美術館もある。

その日は護国神社にお守りを買に行く経路としてこの公園を通り抜けようと思つたのだが、前から気になつていた、池の直径を、中央に在る小島を経て結ぶ橋があり、それを渡つてみることにした。

小島に達すると、祠のようなものがあり、その周りに配置されたベンチのひとつにその白人の女は座つていた。赤毛のショートカットで、白いブラウスにジーンズとシンプルなのだが、上品に着こなしている。三十代前

半か。こんにちは、と挨拶し、英語を話す国からの方ですか、と尋ねると、アメリカ人です、との返答。僕もアメリカからです!という、なんで、あなた日本人じゃない、という淡い混乱と、奇遇さに対する歓迎の錯綜で警戒がやや緩む気配。

僕はミシガン、彼女はオハイオと、住む州もお隣りで奇遇さは更に拡がっていく。週日の昼日中、博多の公園の池の真ん中にある祠の前で、本来ならば何らかの社会貢献をしているべき、アメリカから来たふたりの健康体の大人の間で。

夫はオハイオの車の部品会社に勤めるエンジニアで、愛知県にある本社に三年任期で出向し、二年目に入ったところ。自分は中学校の数学の教師だったが、辞めて帯同した。

ご主人の会社は、僕の働く会社と同系列で、僕も十年ほど前、家族を伴い名古屋に住み、同じような体験をした。

子供がいらないから、彼の出張に時折ついていく。博多には工場があり、夫は昼間は仕事だからひとりであらしているの。ここは素晴らしい公園です。

作り話めいてると思われだろうが、ここまでは事実である。

どうせ作り話だと思われるのなら、この先小説にしてしまおう。

ジェニーは中西部の人間らしく、朴訥とまでは言わないが、地に足の着いた感じのする、素直な女で、両親を訪問中の無為の極致のような僕の生活を、やや誇張を交えて説明するとベンチからひっくり返りそうになって笑ってくれる。Cabin fever ね、というのは極寒地等で長期間屋内に閉じ込められることに拠ってきた精神の異常。護国神社に家族や友人のためにお守りを買っていくのですが、宜しければ一緒に来ませんか、というところから来てお守りって何？ローザリーのようなもの。待てよ、ローザリーは数珠か。Good Luck charm かな。

今日はこれからどうするの？何も予定はない。彼はビジネス・デイナーがあるので、恐らく遅くまで戻らない。知ってるでしょ、日本人のビジネス・デイナーという名を借りた Binge drinking。

神社で彼女の分のお守りも買う。この神社は何を祀っているの。第二次大戦までの戦没者。アメリカ人の私を護ってくれる？いいポイントだ。でももう神様だから、そう細かいことは気にしないんじゃないかな。

また大濠公園まで戻り（詰まるところ、僕の博多での生活のコアは大濠公園なのだ）、もうあらためて誘う必要はないと思っただけなので、特に何も訊かず、美術館で夕飯どきまでの時間を潰す。

数学の教師にしては、美術史の知識も豊富だし、アーティストの動機に対する洞察にも受け売りではない新鮮

さがあり、何度か立ち止まり、本当に深く黙考させられてしまう僕の横顔を少し呆れた風に眺めている。

コーヒを飲みながら、サラリーマンになる前、コロラドの短大で油彩とデッサンを三年ほど教えていたことを打ち明けると、何故辞めたのかと詰問され、アーティストであることと、アート・ティーチャーであることとのコンピタンシーの感覚的相違などもごもご口籠っていると、真の理解に到達したブラックティショナー（実践家）には教育の責任もあるのよ、とぴしりと諫められる。深く腰掛けたカフェのソファで、言葉を失い、項垂れ、打ちひしがれる僕を見て吹き出し、ごめんなさい、私教えることが大好きだったから、とジェニー。

素早く立ち直り、美味しいお鮎を食べに行こう、という僕の唐突な提案には予想通り OK。

地下鉄では二駅の赤坂にある「やま庄」という店まで、ぶらぶらお濠を眺めながら歩く。ジェニーは両手をジーンズのポケットに入れ（バッグはバックパック）、口笛を吹いている。

Sound of Music の My Favorite things だね。

好き？

口笛を吹きながら歩く女性と初めてデートしたよ。

ここの鮎は地の小魚なども豊富で旨い。しかし、両親に連れられてしか来たことがないので、店の者は外人の女との来店をやや訝っている様子。カウンターにつくと、僕がアメリカで暮らしていることを知っている、オーナ

「でもある板前に奥様ですか、と訊かれ、そうですと答えると、ジェニーは、日本語もある程度分かるのであるう、僕の横顔を上目で睨み、シニカルに笑っている。

僕は恋に落ちたと感じた。

出されるものは、雲丹でも白子でも、何でも食べる。その屈託のない様子に育ちの良さを感じる。

案の定、去り際に、とてもとても美味しかったです。今まで食べてきた鮨は何だったんだろう、と思うくらい美味しかった、と日本語で告げて板前を喜ばせる。

宿まで送ろう、という、泊まっているのはホテルオークラで、そこも歩ける距離である。歩きながら、不適切かな、と思いながらも、右手で彼女の左手に触れると強く握り返してくれる。

二年前には今こうして日本で暮らしていることを想像すらできなかった、とジェニー。

出張にくつついて、色々なところを見られるのは愉しいけど、と同時に、私は百パーセント、ブライアンの人生の展開に支配される浮草なんだ、という実感も強まるばかり。

それは相手がブライアンでなく、誰であってもそんなんだろうけど。

ホテルのエントランスからロビーに入ると、フロントデスクの後ろに立つ支配人が目で挨拶する。ここへも両

親に連れられてよく食事に来るのだ。この男も板前同様、連れの外人女を見て判断停止のような表情をしている。あなた有名なの？ いい歳して親掛りなだけだ。

荷物を取ってくるからここで待ってて。

ジェニーは僕から目を離さず、後ずさりするようにしてエレベーターの中に消えて行く。

ドアが閉まった後も、呪術に掛かったように立ち尽くしていた。

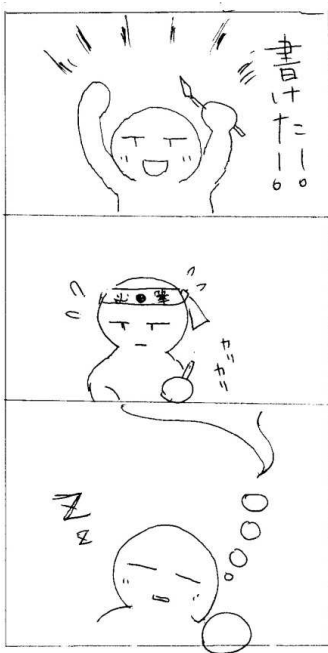
支配人の頭上のニューヨーク時間を告げる時計が五分進んだところでタクシー乗り場へ自分自身を何かから引き剥がすようにして歩く。

行き先を告げ、車が走り出すと、「ブライアンではなく、誰であっても」というジェニーの言葉を頭の中で三度唱える。

マンシヨンの前に立ち、両親の住む最上階を見上げ、連絡しなかったから心配してるだろうな、と思った途端呪術から解き放たれるような震えを覚えた。

そして思い出そうとしても、ジェニーの顔を思い出せないことに気付く。





一緒に太極拳、やりませんか。

定有堂2階

遊動円木

十二

五百川 知子

アシル

薄氷の解けて一草放ちたる

春時雨学生街のパン屋さん

早春の襟元淡く飾りたし

麦踏に確かなリズム生まれをり

強東風の山は逆毛を立つること

猫と枕のはなし



ドラマメリア

(座敷わらし)

二月二日は猫の日らしい。ニャーニャーニャー、だからだそ
うだ。あまり多くの人には言っていないが、猫を飼っている。二
匹。

最近、疲れ気味で血迷ったのか、抱きまくらを買った。少し
前にドラマで流行した、もちもちした手触りの動物型のもの。
猫の話はどうしたんだと思われそうだが、ちゃんと関係はあ
る。

気がかりだったのは猫のことだった。というのも、以前に人か
らプレゼントされた猫型のぬいぐるみに対する反応が激しかっ
たからだ。

それはとても精巧なぬいぐるみで、一見本物の猫かと思間
違えるほどよくできていた。だからだったのだろう。年長の雌猫
の方は、いつもじつとくまづくまって動かない具合の悪い仲間(動
物からはそう見えたのだろう)を気遣い、優しく舐めて寄り添
ってくれた。しかし、活発な年下の三毛猫の方は、同じ柄に敵
愾心を燃やしたのか、私がそちらをかわいがっているように見

えたのか、激しく攻撃。あるいは、やんちゃな時期だったから、
激しいじゃれあいのつもりだったのかもしれない。結果、顔が見
るも可哀想な状態になってしまい、以後、防虫剤とともにクロ
ーゼットで眠っている。ぬいぐるみを繕う、神の手の持ち主が現
れるのを待ちながら。

さいわい、今回はフォルムが枕型だからか、それとも質感がふ
さふさではないからか、彼らを刺激しなかったようだった。完
全に調度品扱いだ。……あるいは、私への愛情が冷めたのか。だ
としたら、少しさびしい。

・編集後記：

ワクサカさんから「音信不通」の人々でオフ会したら、
どうスかね？と提案を受けました。ちよつと惹かれます。
匿名に気が緩んで暴露してしまいましたが、猫飼イス
トだということは、相変わらず周囲には秘密です。特に
深い意味はないのですが。

ドラマメリア(編集長)

装丁家の桂川潤さんから、ご著書『装丁、あれこれ』彩
流社をお贈りいただきました。装丁大事！と気づきまし
た。定有堂で、文庫本の表紙陳列がいきなりドツと増え
てるのは、じつはそのせいです。

奈良敏行(発行人)